

佐那河内村における子ども部屋と家庭教育・しつけに関する調査研究

----- 教育班 (徳島教育社会学会) -----

伴 恒信^{*1} 中津 守^{*1} 早淵百合子^{*1} 森 祐大^{*1} 小林 典子^{*1} 古川 渚^{*1}
 松口 和子^{*1} 藤本 有美^{*1} 新居 裕子^{*1} 島田有加里^{*1}

1. 調査・研究の目的

子ども部屋 (個室) についてはこれまで多くの研究がなされ、子ども部屋の使用目的意識や使用形態、あるいは間取りが子どもの住生活や自立性に影響を与えるとの報告がある¹⁾。一般的には、自我の確立や自立のために個室が重要であるとの意見が見られる反面、近年の引きこもりや不登校など教育問題の原因として個室を問題視する意見もある。一方、家庭教育・しつけについても数多くの研究がなされている。現代のしつけは「理由付け」と「口説き」で特徴付けられ、問題点として、しつけ手が母親に偏在、しつけ理念に異なる学説や原理が混在、その結果しつけが不安定で一貫性を欠く状態であることが指摘されている²⁾。以上のことから本調査では、子ども部屋に関わる家庭教育・しつけを調査し、これらの実態をより明確にとらえた上で、子どもの住生活行為と意識、子どもを取り巻く家族との関わりや家庭教育・しつけ、住まいの諸条件が、自立性育成にどのように関わるかを分析することを目的とする。

なお、この研究では、自立を「自己を確立し、人とのかかわりでは、自分を守りながらも (自己中心から脱して) 他者を認めることができるようになる段階」とし、論を進めていきたいと思う。

2. 調査方法の概略

平成13年6月～8月に佐那河内町内の佐那河内小5・6年生とその保護者、佐那河内中1・2・3年生とその保護者を対象として質問紙調査を行った。

有効回答数の内訳は、児童生徒145名、保護者104名 (うち母親による回答91名) である。

質問紙を構成する領域は「自立性」との関連から、「子ども部屋」「家庭教育・しつけ」「家族との絆」「住まいの諸条件」である。

3. 調査・研究の結果と考察

1) 佐那河内村における子どもの実態

佐那河内村での「子ども部屋」「家庭教育・しつけ」「家族との絆」について調べた結果を単純集計して考察を加える。

(1) 「子ども部屋」に関わる調査結果

a. 子ども部屋の所有率とその使用目的

子ども部屋の有無と使用目的について質問した。結果は以下の通りである (図1・2)。

子ども部屋については、小学校高学年では93.0%、中学校では96.3%の所有率であった (いずれも兄弟姉妹共用を含む)。また、そのうち個人としての占有

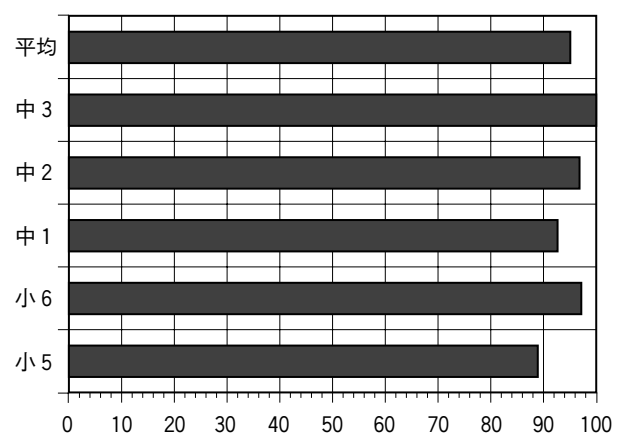


図1 子ども部屋の有無

*1 鳴門教育大学

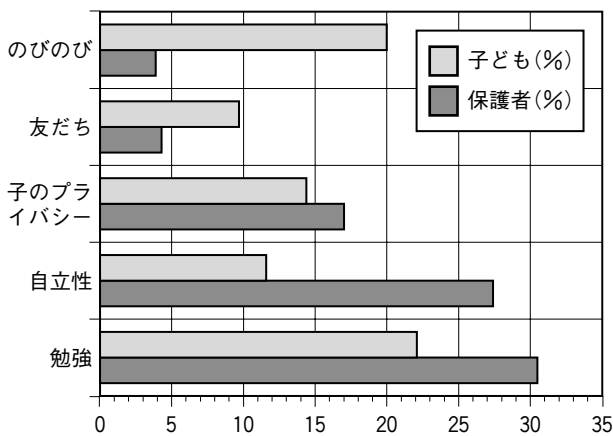


図2 子ども部屋の目的 (複数回答)

率は小学校高学年が34.8%、中学校が82.9%であった。

使用目的については、「子ども部屋は何のためにあると思いますか」という問いに対して、親の上位5項目は、「勉強のため」30.5%「自立性育成のため」27.4%「子どものプライバシーのため」17.0%「就寝のため」12.2%「友達づきあいのため」4.3%であった。一方、子どもは、「のびのびと生活するため」20.0%「勉強のため」22.1%「遊びや趣味のため」11.9%「子どものプライバシーのため」14.4%「友達づきあいのため」9.7%の順であった。

このことから、子どもには「自立性育成」ではなく、「のびのび生活」「遊び趣味」が上位にきており、親との意識のズレが端的にあらわれていることがわかる。

b. 子ども部屋での住生活行為

子ども部屋ではどのような生活行為を行っているかについて質問した。結果は以下の通りである(図3)。

「寝る」77.2%「着替え」70.3%などの私的行為は

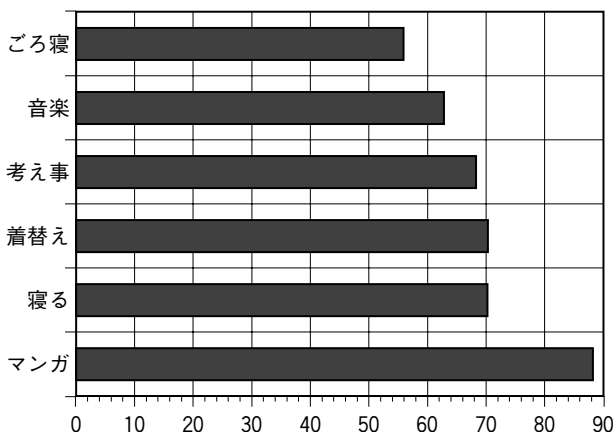


図3 部屋での様子 (“いつも” “わりと” の合計)

当然のことであるが、「マンガや雑誌を読む」88.2%「ごろ寝をする」55.9%「音楽を聴く」62.8%「考え事をする」68.3%といった行為の割合が高かった。

このことから、「睡眠」「着替え」といった身体にかかわる行為にも「食事」「テレビ」「会話」のような、比較的家族とともに行うことが多い行為にも属さない、趣味的な行為が、子ども部屋で多く見られるといえる。

(2) 「家庭教育・しつけ」に関する調査結果

家庭教育・しつけをとらえる観点として、「子供部屋に関わるしつけ言葉」に着目し、その実態をとらえることを試みた。いくつかの言葉について、親に対しては「親から子どもに対しての言葉かけがどのくらいありますか」、子どもに対しては「家の人から言われますか」という質問を行った。結果は以下の通りである(図4)。

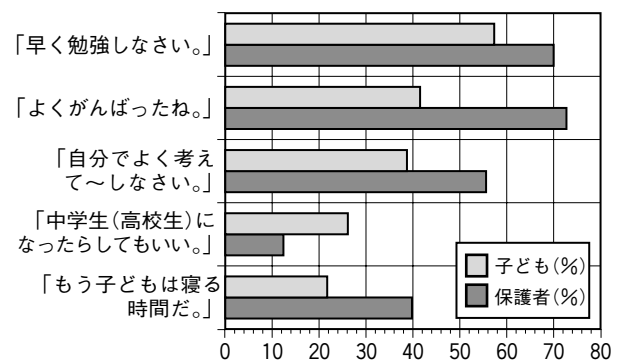


図4 親から子への言葉かけ (よく・わりとするの合計)

「早く勉強しなさい」という言葉について、親の70%が「よく言う・わりと言う」と答えており、子どもは57.3%が「よく言われる・わりといわれる」と答えている。

同様に、「よく頑張ったね」という言葉かけは、親の72.7%が「よく言う・わりという」を、子どもの41.5%が「よく言われる・わりといわれる」と答えている。

他の言葉についても、「中学生(高校生)になったらしてもよい」のように、一部逆転はあるものの、全般的には子どもより親のほうが言葉かけに対する認識の度合いが高いことが読み取れる。

以上のことから、言葉かけに関しても親子間でズレがあることが分かる。すなわち、「親が思ってい

るほど子どもは聞いていない」ということがいえるだろう。

(3) 「家族との絆」に関する調査結果

家族との絆をとらえる観点として、会話など「家族との接触」について質問した。結果は以下のとおりである(表1)。

表1 家での話し相手 (%)

	小学校	中学校	平均
父	74.2	50.6	62.4
母	87.1	76.5	81.8
祖父	44.8	27.2	36
祖母	67.7	39.5	53.6
兄弟姉妹	80.6	72.8	76.7
平均	70.88	53.32	62.1

「家族とどれくらい話をしますか」と言う質問に対しては、家族のいずれか(両親、兄弟姉妹、祖父母)との会話がある子どもの割合が全体の6割を超えた。

また、「わからないことがあったとき、どうしますか」と言う質問に対しては、「家の人に教えてもらう」という割合が46.2%と全体の半数近くを占めた。

その他、家で気をつけることとして、「1日1回は家族全員が揃って食事をする」という子どもの割合が全体の7割を超えた。その他、「一人一役お手伝い」、「家族のいる部屋を通過して自分の部屋へ行く」といったことが「ある」と答えた子どもの割合が高かったことなども合わせて考えると、家族を「つなぐ」意識の志向性が示されていると言えよう。

(4) 「住まいの諸条件」に関する調査結果

子どもの自立性育成には住まいの諸条件も大きく関わってくると考えられる。そこで、「子ども部屋のある場所」「子ども部屋は共用かどうか」について質問を行った。結果は以下のとおりである(表2・3)。

表2 部屋のある場所 (%)

	その部屋	すぐとなり	同じ階	別の階
居間	1.3	9.7	43.1	75.2
食堂	4.8	4.8	20.7	69.7
親の寝室	4.8	32.4	37.9	24.1
全体に対する割合			24.0	54.3

前者については居間や食堂など家族が一堂に会するところ(家の中でも比較的にぎやかなところ)から離れた場所(別の階や、同じ階でも少し離れたところ)にある割合が全

表3 一人で使える部屋を持っている子どもの割合

	人数	割合(%)
小学校	23	35
中学校	68	83
平均	-	59

体の8割近くを占めた。後者に関しては約6割の子どもが1人で使える子ども部屋を与えられている。

また、部屋に鍵ができる子どもが3割、勉強部屋が離れにある子どもが2割ほど見られる。

以上のことから、家族と離れ一人になれる空間が保証されているといえるだろう。家族との絆がしっかりと保たれている一方で、このような空間が保障されていることは、自立性育成にとって注目すべき事柄ではないかと思われる。

2) 「自立性」の因子分析とそれを中心とした重回帰分析

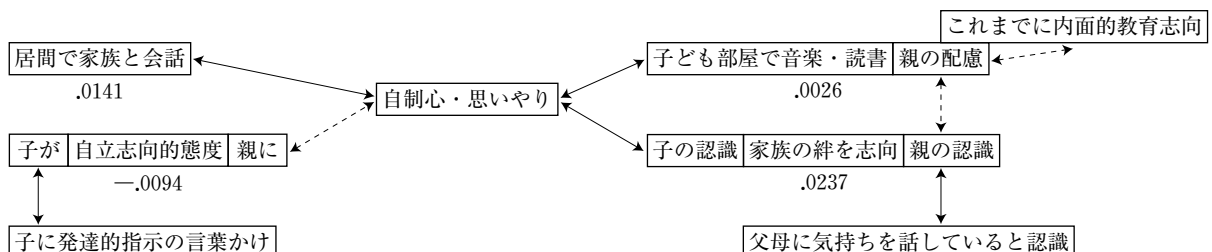
子どもの意識と行動に関わる質問項目の回答結果から3つの因子を抽出し、因子1を「自制心・思いやり」、因子2を「自分探し」、因子3を「独立・親離れ」と名付けた(固定値1.1以上 寄与率合計49.4%)。さらに、子どもと保護者のデータ重回帰分析を行い、その主な結果を合成して図式化した。

(1) 因子1「自制心・思いやり」

(重相関係数0.50521 寄与率23.0%)

「自制心・思いやり」に影響を及ぼす要因として推定されるのは、規定力の強い順に、「子ども部屋で音楽・読書」がプラス、「親に自立志向的態度」がマイナス、「居間で家族と会話」がプラス、「子の認識は家族の絆を志向」がプラスの要因となっている。

これらのことから、自己を統制し思いやりのある行動のできる子どもは、自分の部屋では音楽を聞



因子1

き・読書をして過ごし、居間で家族とよく会話があり、家族そろっての食事や手伝いを心がける家庭で育っていることが影響していると考えられる。また、そのような子どもほど、親への過度の要求や反発などが減っていく傾向が見られる。

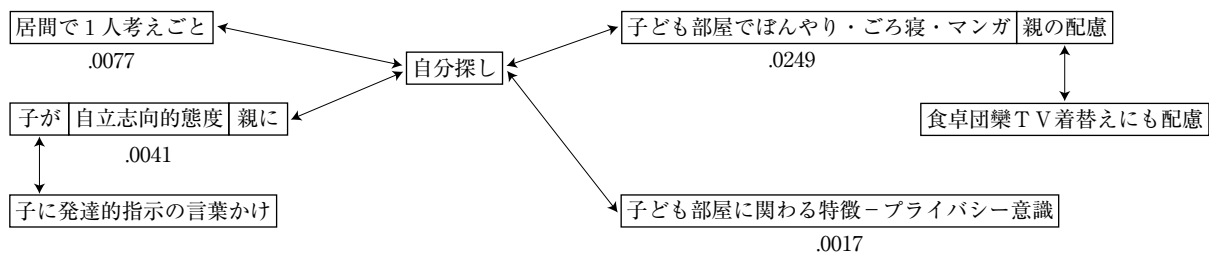
(2) 因子2「自分探し」

(重相関係数0.53259 寄与率26.0%)

「自分探し」に影響を及ぼす要因として推定されるのは、規定力の強い順に、「子ども部屋に関わる特徴としてプライバシー意識」、「親に自立志向的態度

度」、「居間で1人考えごと」、「子ども部屋でぼんやり・ごろ寝・マンガ」がプラスの要因となっている。

これらのことから、自分についての安定感や自我形成を求めている子どもは、自分の部屋ではマンガを読んだりごろ寝をしたりして特に何をするこもなく時間を使い、居間にいるときも1人で考えごとをして過ごすことが多く、自分の部屋に入って欲しくない、部屋に鍵をつけたいというプライバシーを意識した要求をする傾向がみられる。



因子2

(3) 因子3「独立・親離れ」

(重相関係数0.52561 寄与率25.1%)

「独立・親離れ」に影響を及ぼす要因として推定されるのは、規定力の強い順に、「親に自立志向的態度」、「子ども部屋で勉強する・電話をかける」、「ぼんやり・ごろ寝・マンガ」がプラス、「部屋で1人のとき内省」がマイナスの要因となっている。

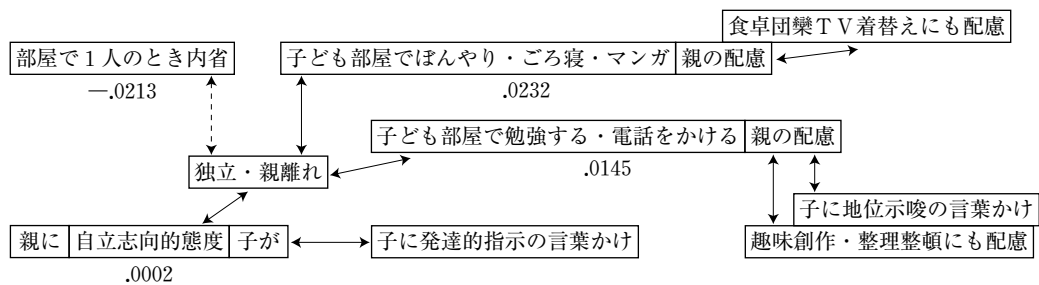
これらのことから、自分のことは自分で決めたい・親から離れたいと考える子どもは、自分の部屋では、勉強する・電話をかけるか、ぼんやり・ごろ寝・マンガといったことをして過ごし、考えごとをするときは自分を謙虚に振り返るようなことは少ないと考えられる。

4. 調査のまとめ・今後の課題

現時点までの分析では、住まいの諸条件や親からのしつけ言葉と子どもの自立性育成との直接的な関連について明確な有意差が見られなかった。

言い換えると、子ども部屋が個室だから親離れが進んでいるとか、親のいる部屋から遠いほど自制心があるといったようなことである。「～しなさい」「親の言うことを聞きなさい」といったような命令的な言葉をかけると親離れが進むとか、「よくがんばったね」「言いたいことがあるなら言ってごらん」といったような励ましの言葉がそのまま自制心につながるというような結果は得られていない。

しかし、他の多くの要因が推定されるので、今後



因子3

は聞き取り調査も考慮して、佐那河内村の地域の特性をふまえた分析と考察をしていく予定である。

とりあえず、今回の調査からは、子ども部屋があるかないかが、即、子どもに影響を与えるとは言えないが、子ども部屋以外での家族とのつながりやそこでの過ごし方が、子ども部屋での過ごし方ひいては自己形成に影響を与えることは間違いないようである。

最後になりましたが、質問紙調査と聞き取り調査

にご協力いただいた佐那河内小学校中学校の児童・生徒、保護者の皆様、教育委員会の方々に厚くお礼を申しあげたい。
(文責 早測・森)

注・文献

- 1) 中島喜美子(1994): 子ども部屋に関する研究(その2) —子ども部屋が子どもに与える影響—、三重大学教育学部研究紀要第45巻。
- 2) 柴野昌山編(1989): 『しつけの社会学「序章 しつけの構図」』世界思想社。